

# 佛蘭西書巡覧 5

平山 弓月

二か国語辞典には、おのずから限界があるといわねばならない。  
訳語が、必ずしもピッタリ対応しているとは限らないからである。

田島 宏



新入生を迎え、新しい学年が始まりました。今回は、外国語大学らしく辞典の話をしましょう。

語学学習は辞典なしでは進められません。最近では、多くの学習者が電子媒体の「辞典もどき」を使っていますが、やはり紙ベースの辞典が本筋でしょう。その理由は、先生方が教室でお話しされると思いますので、ここでは立ち入りません。

一年次から二年次の半ばぐらいまでは、二か国語辞典を使わざるを得ませんが、本来日本語とフランス語とでは言語文化的にギャップが大きく、学習が進むと、上記のような田島先生がお書きになっておられる問題が起きてきます。やはり出来れば一か国語辞典を使いたいものです。

私たちが学ぶのは現代フランス語ですから、辞典として先ず頭に浮かぶのは、第二版の全面増補改訂版が9巻本で刊行された、一般に**Le Grand Robert de la langue française**『ロベール・フランス語大辞典』と呼ばれているものではないでしょうか。80,000語の見出し語を持ち、用例を示すため古今の文学者から250,000もの引用がなされています。この辞典の元々の名前は**Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française**「フランス語のアルファベット順による類語辞典」といいます。語彙記述研究者**lexicographe**であり編集者であったポール・ロベールPaul Robert(1910-1980)が、1951年から1966年にかけて、編集拠点をアルジェ、カサブランカ、パリと移しながら第一版の6巻を完成させました(後の1970年に補巻一巻が出ました)。アルジェリア生まれのフランス人であるロベールは、当初法律を学び弁護士になりましたが、のちに経済学をも収め、博士論文の執筆時に正確な語彙を求め、既存の辞典では物足りなく感じてしまったのです。そこで彼は自分自身の辞典を作り上げることを決心し、1945年には語彙記述学研究に転進したのです。ロベールの辞典編纂に、早くから協力したのがアラン・レイAlain Rey(1928-)でした。言語学・語彙記述学・言語哲学等々の幅広い学識を持ったレイはロベールの辞典編纂に欠かせぬ存在でした。そしてロベールなきあと、上述の第二版全面改訂版を指揮したのがレイでした。

アカデミー・フランセーズは1952年に、この辞典の第一分冊が出るとすぐに、賞を授与することを持ってその労に応えました。まさに現代フランス語最大の辞典の栄えある船出でした。

一つの単語といえども、それが用いられている時代やコンテキストによって、意味するものが違うことがよくあります。つまり言葉が使われている「場」を無視しては、私たちは正確な意味にたどり着けないのです。ロベールのこの辞典では、分野ごとに語彙の表すものを、詳細に説明しています。語の初出年代や語源、類語・同義語・反意語などの記述も豊富で言葉の世界の広がりを実感させてくれます。さらに、「用例のない辞典は辞典にあらず」といわれますが、この辞典は文学者からの引用と言う形で、語彙の用例を潤沢に記載していて、あたかもフランス文学の「詞華集」のごとき様相をも示しています。

1967年に出た**Le Petit Robert**(**Le Grand Robert**に比べて小さいというだけで、見出し語は50,000語あります)や**Le Micro Robert**(1971)にもロベール、レイの情熱は受け継がれています。

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)